

---

# 首人間の集い

ぬじゅわきし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

首人間の集い

### 【Zコード】

Z04610

### 【作者名】

ぬじゅわきし

### 【あらすじ】

森でカツブルが迷い込んだ、その場所は・・・上司からクビにされ、本当に首になってしまった人々の集まりであった・・・。

とあるオフィスにて。真田と云う社員が上司に詰られていた。

「いつたいどうこう事だ！ 真田くん！ 君のミスのせいで、経営ががた落ちだつ！」

「すみません！」

「すみませんで済むと思うのか！」

「…」の責任は…必ず取ります…

「その通りだ。必ず責任を取つてもらおう。君はクビだ…」

「…え？」

「そうだ！ 君はクビだ！」

しゅぽーん。真田の首は胴体からまるでコルクを抜くよじに勢いよく飛び出した。体はそのまま仰向けに倒れた。首はぼんと床を跳ね、着地した。首は立ち上がり、ため息をついた。

「あーあ… クビになっちゃつた…」

そしてとことこ歩いてオフィスを出た。

場所は変わつて、夜の森の中。一人、男女がデートという事で探検していたのだが、すっかり迷つてしまい、今や迷子。あらう事か二人は携帯を忘れてしまい、絶体絶命。女性の奈穂子は男性の達志に叫んだ。

「なんで、ここに行こうと思つたのよ…」

「スリルがあるかな…と思つて…」

「こんなスリルいらないわ！ ネズミーランドがいってあれだけ言つたのに…」

「しょうがないだろ。あれだけ混んでたんだから。」「

「携帯ぐらい持つていいでよ！」

「菜穂ちゃんだって持つてきてよ！」「

「私のせいにするの！？」

「までよ！言い争わないで解決法を考えよう！」「

そして二人はしばらく黙り、とりあえず前進した。

菜穂子は言った。

「ねえ…食べ物とかないの。」

「ないよ。もう全部食べきっちゃった。」「

「もうどうするのよお、飢え死にするわあ、来世を呪つてやるうう

「静かに…」

「静かに…」

「静かにして！何か…いる…」

見回すと、どこかに灯りが漏れている事に気づいた。

「…何かしら。宿？」「

「灯りがあるという事は人がいるのだな。」「

「どうする？達っちゃん。」

「…進んでみよう。」

草葉を分けて一人は灯りの方へ直進した。やがて彼らは木々を抜けた。だがそこは宿ではなかつた。広場であった。

「なんだここは…」「

と達志が呟いたその時。

「くーび、くーび、僕らはくーび、くーびにさーれた首人間～」  
不気味な歌声と共に、周りから沢山首が歩いてきた。二人は悲鳴をあげた。

「きあああああ

「く…首人間だ！」

二人は恐怖のあまり、足がすくんだ。一人の首が言った。

「こいつらは誰だ…」

「新入りか？」

「首が繫がつている。」

「じゃあ違うのか。」

「迷いこんだのだろう…可哀想に…」

二人は叫んだ。

「お願いです！私達を首にしないでください…」

すると首人間たちは答えた。

「私達にはその力はない…権限もない…」

「首にできるのは権威者だけ。上司だけ。」

「私達は失業者。」

「失業者。」

そして首人間たちは「はあ…」とため息をついた。

菜穂子は哀れに思つて言つた。

「可哀想に…何とかならないのかしら。」

「つながる方法はある。」

背後から声が聞こえてきた。

「仕事を発見すれば首が繫がる。そうだ。」

一人の人間が現れた。達志は訊ねた。

「あなたは…」

「首人間の長、首首男だ。」

「しかしあなたは首が繫がつているではありませんか。」

「そうだ。昔は首だけだったが…」

首男は回想する。そう、彼らのためにハローワークを臨時に作つた。だが、その時。

“違う、そのつもりはない、やめる、やめるー！”

背後から首のない胴体が現れ、必死に抵抗する首をひろつて、胴体

に繋げた。

「…そういう事があつたんだよ。」

「そうなの…可哀想に…」

「この集いはその集いだよ。」

しばらくして、一首の首が叫んだ。

「やつたー、仕事が見つかったーー！」

「え！おめでとう！」

「おめでとう！」

「体はいつ来るの？」

「もうすぐじやないかなあ。」

そのとき、しゃしゃしゃと何かが草を搔き分ける音とが聞こえた。

達志と菜穂子は言った。

「何かしら…」

「さあ…」

その時一人の背後から首なし人間が現れ、衝突した。なにせ30才の体なのでその衝撃は大きく二人は前のめりで倒れた。首なし人間はつまずいて一人の上に倒れた。

「あいたたたたた…」

二人はそれを振り払いながら起き上がった。

その時、首なし人間が立ち上がった。

ほのぼのするホラー。

注：この話は爽やかなグロが描かれています。あくまで爽やかで、汚くはないですが、でも苦手な方はブラウザバック推奨。

とあるオフィスにて。真田といつ社員が上司に詰られていた。

「いつたいどういう事だ！真田くん！君のミスのせいで、経営ががた落ちだつ！」

「すみません！」「

「すみませんで済むと思つのか！」「

「…」の責任は…必ず取ります…」「

「その通りだ。必ず責任を取つてもらおう。君はクビだ…」「…え？」

「そうだ！君はクビだ！」

しゅぽーん。真田の首は胴体からまるでコルクを抜くように勢いよく飛び出した。体はそのまま仰向けに倒れた。首はぼんと床を跳ね、着地した。首は立ち上がり、ため息をついた。

「あーあ…クビになっちゃつた…」

そしてとじとじ歩いてオフィスを出た。

場所は変わつて、夜の森の中。一人、男女がテートといつ事で探検していたのだが、すっかり迷つてしまい、今や迷子。あらう事が二人は携帯を忘れてしまい、絶体絶命。女性の奈穂子は男性の達志に叫んだ。

「なんで、ここに行いつと思つたのよ…」「

「スリルがあるかな…と思つて…」

「こんなスリルいらないわ！ネズミーランドがいいつてあれだけ言つたのに！」

「しようがないだろ。あれだけ混んでたんだから。」「

「携帯ぐらい持つていつてよ…」

「菜穂ちゃんだつて持つてきてよ…」

「私のせいにするの！？」

「までよ！言い争わないで解決法を考えよう！」

そして二人はしばらく黙り、とりあえず前進した。

菜穂子は言った。

「ねえ…食べ物とかないの。」

「ないよ。もう全部食べきつちゃった。」

「もうどうするのよお、飢え死にするわあ、来世を呪つてやるうう」

「静かに！」

「静かに！」

「静かにして！何か…いる…」

見回すと、どこかに灯りが漏れている事に気づいた。

「…何かしら。宿？」

「灯りがあるという事は人がいるのだな。」

「どうする？達っちゃん。」

「…進んでみよう。」

草葉を分けて一人は灯りの方へ直進した。やがて彼らは木々を抜けた。

だがそこは宿ではなかつた。広場であつた。

「なんだここは…」

と達志が呟いたその時。

「くーび、くーび、僕らはくーび、くーびにさーれた首人間～」  
不気味な歌声と共に、周りから沢山首が歩いてきた。二人は悲鳴をあげた。

「きあああああ」

「く…首人間だ！」

二人は恐怖のあまり、足がすくんだ。一人の首が言った。

「こいつらは誰だ…」

「新入りか？」

「首が繫がっている。」

「じゃあ違うのか。」

「迷いこんだのだろう…可哀想に…」

二人は叫んだ。

「お願いです！私達を首にしないでください…」  
すると首人間たちは答えた。

「私達にはその力はない…権限もない…」

「首にできるのは權威者だけ。上司だけ。」

「私達は失業者。」

「失業者。」

そして首人間たちは「はあ…」とため息をついた。

菜穂子は哀れに思つて言った。

「可哀想に…何とかならないのかしら。」

「つながる方法はある。」

背後から声が聞こえてきた。

「仕事を発見すれば首が繫がる。そうだ。」

一人の人間が現れた。達志は訊ねた。

「あなたは…」

「首人間の長、首首男だ。」

「しかしあなたは首が繫がっているではありませんか。」

「そうだ。昔は首だけだったが…」

首男は回想する。そう、彼らのためにハローワークを臨時に作つた。  
だが、その時。

“違う、そのつもりはない、やめる、やめるー！”

背後から首のない胴体が現れ、必死に抵抗する首をひろうって、胴体  
に繋げた。

「…そういう事があつたんだよ。」

「そうなの…可哀想に…」

「「」の集いはその集いだよ。」「

しばらくして、一首の首が叫んだ。

「やつたー、仕事が見つかったーー！」

「え！おめでとうー！」

「おめでとうー！」

「体はいつ来るの？」「

「もうすぐじゃないかなあ。」「

そのとき、しゃしゃしゃと何かが草を掻き分ける音とが聞こえた。達志と菜穂子は言った。

「何かしら…」「

「さあ…」

その時一人の背後から首なし人間が現れ、衝突した。なにせ40代の体なのでその衝撃は大きく二人は前のめりで倒れた。首なし人間はつまずいて一人の上に倒れた。

「あいたたたたた…」

二人はそれを振り払いながら起き上がった。

その時、首なし人間が立ち上がった。ふらふらと一周回った後、突然達志の首を掴み始めた。

「きやあ！」

「大変だ！ぶつかって、混乱している！このままでは・・・」「すぽん！」という音が鳴り、達志の首がどれ、首なし人間の首についた。40代の体を持つてしまつた達志は悲鳴を上げた。

「わあ！」

そして達志の体はまっすぐ菜穂子を見つめ、手を伸ばして追いかけてきた。

「きや——————！」

菜穂子は逃げ出した。後ろを向けば首のない達志がここでここ追いかけてくる。彼女は必死に逃げた。逃げに逃げた。

だが、木の根に躡いた。

「ぐひつ」

背後に影を感じた。そう。達志だ。両手を伸ばして、菜穂子の首を掴んだ。

その時、達志の体はなぎ倒された。背後から、40代の達志が倒したのだ。達志は言った。

「お前にくれてやるのは菜穂子じゃねえ、俺の首だ。」

達志の体は達志の首を40代の体から引っこ抜いた。そして、達志はもとにもどった。残った体は、また首を捜し求めて走り去つていった。

「危ないとこらだつたね。」

「・・う・・・・・ありがとう・・・・・」

「あれ?なんか光りが見える。」

「また集いじゃないの。」

「いや、ちがう。ほら。」

見ると、なんと街の灯りではないか。そうだ。逃げているうちに森の端まで行つたのだ。こうして彼らは無事森から出ることが出来た。

「やつたー!」

「こうなつたのも首人間のおかげかもね。」

「そうだね。」

一人は森に向かつて叫んだ。

「ありがとう!首人間!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0461o/>

---

首人間の集い

2010年10月10日19時00分発行